The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	変動期における中国家庭の階層移動と教育戦略-8つの家庭のインタビュー分析を手がかりとして-
Author(s)	張, 建
Citation	大阪大学教育学年報. 2005, 10, p. 43-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8737
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 第10号（2005年）
Annals of Educational Studies Vol.10

変動期における中国家庭の階層移動と教育戦略
－８つの家庭のインタビュー分析を手がかりとして－

張　　建

【要旨】
現代の中国において経済構造の大きな変化とともに、社会構造も大きく変わっている。中国社会の階層化に伴って、教育資源の配分とそれへの接近の仕方も、昔と大きく変わりつつある。家庭背景が子どもの教育機会、学業達成に及ぼす影響は、ますます増大すると考えられる。
本稿は、中国東部にある都市の8つの家庭の分析を通じて、各家庭の所有する資本と教育戦略選択の実態を明らかにするとともに、変動期における中国都市部の各階層の変化が子どもの学業達成に与える影響と、そのメカニズムを分析することを目的とした。

１．はじめに

現在、中国には激しい社会変動が見られる。経済構造の大きな変化とともに、社会構造も大きく変化している。1970年代までの「平均化」社会形態が、現在の階層の多様化した社会形態へと変化しつつある。社会構造が著しく分化し、職業を基準とする新しい社会階層分化メカニズムが、これまでの政治、戸籍、行政の身分を根拠とする分化メカニズムに次第に取って代わるようになったからである。従来の「2つの階級、1つの階層」（労働者階級、農民階級と知識人階層）からなる社会構造は、10階層に分化した社会構造に変化したとされる（陸学芸　2002）。社会階層分化の進行とともに、中国において多様な社会問題が発生してきた。特に都市部で深刻化しているのは、失業問題、貧富格差の拡大の問題などである。中国の国家統計局によると、所得の上位20%の市民と下位20%の市民の格差は3倍で、さらに上位と下位それぞれ10%の間に見られる所得格差は4倍にもなっている（張紀潯　2001）。

中国社会の階層分化に伴って、教育資源の配分とそれへの接近の仕方も、昔と大きく変わりつつある。家庭背景が子どもの教育機会、学業達成に及ぼす影響は、ますます増大すると考えられる。特に現在、義務教育段階でも、名門学校及びよりよい学校は多額の寄付金を徴収している。事実、子どもが名門学校及びよりよい学校に入学するか否かは、家庭の経済力と社会背景に左右されている。

本論文は、中国東部のある都市の8つの家庭の分析を通じて、各家庭の所有する資本と教育戦略選択の実態を明らかにするとともに、変動期における中国都市部の各階層の変化が子どもの学業達成に与える影響と、そのメカニズムを分析していくことを目的とする。

本論文の構成は、まず第2節で分析の理論的枠組みを明確にし、第3節で調査の概要を説明する。そして第4節で、8つの家庭を上層家庭と下層家庭に分けてそれぞれの家庭の社会的移動の実態を描き出す。第5節では階層ごとに成績のいい生徒の家庭とよくない生徒の家庭に見られる資本構造と教育戦略の分析に当たる。そして、第6節で文章の全体の考察を行う。

２．分析の理論的枠組み

本研究は、中国における各階層の家庭の文化資本の構造と教育戦略の特徴を明らかにする上で、ブルデューの「文化資本」の理論とコールマンの「社会関係資本」の理論を重要な参考とする。

P.ブルデューは文化的再生産論において、階級の文化資本の所有状況は子どもの教育達成に決定的な影響を与えていると論じ、労働者家庭の子どもたちは、文化資本を身につける容易さと文化資本を獲得しよ

うとする傾向という二重の意味において、不利な立場に置かれていると指摘している。文化資本は、3つの形態において存在しうる。つまり、身体化された形態、客体化された形態、そして制度化された形態である。これら資本の各形態は、特定の条件で互いに転化する事ができる（P.Bourdieu 1986）。文化的再生産論の文脈において、P.ブルデューは基本的に文化資本に「個人的」あるいは「家族総体的」な所有という属性を与えている。その上、P.ブルデューは「拡大家族」あるいは「家族集団」に属する高度教育終了者また在学者の存在は、その家庭にとって特別な文化的情況だと指摘しているが、それを「家庭環境の特異性」と見て、具体的な分析をしなかった（P.ブルデュー 1964＝1997 pp.46-47）。

P.ブルデューの理論と部分的に重なるが、コールマンは自分自身の資本概念を提出している。つまり、子どもの学業達成に影響する資本を物的資本（Physical Capital）、人的資本（Human Capital）、社会関係資本（Social Capital）の3つに分類した。コールマンは社会関係資本の役割を重要視し、家庭が所有する資本の他の形態は、社会関係資本を媒介してのみ機能しうると主張する（James S.Coleman 1988）。

本論文において、文化資本と社会関係資本の概念に従って、各家庭の資本の所有状況と教育戦略への影響を考察する。また、教育戦略は、P.ブルデューの文化的再生産論において意識されない側面も含まれているが、本論文では、「戦略は当該社会状況において、自らの目的のために動員可能な資本を動員可能な経験則にしたがって能動的に使用すること」（米村 1999 p.8）という定義を参考にして、家庭の教育戦略の意識的な部分に焦点を当てたい。

3．調査の概要

本研究では、中国L市にあるY中学校N組を中心に、2回にわたって、現地調査を行った。第1回調査は2002年4月8日―4月29日（中学校2年第2学期）の3週間で、第2回調査は9月1日－9月21日（中学校3年第1学期）の3週間である。主な研究方法は、アンケート調査と現場観察、インタビュー調査である。

インタビューの対象は、「目的サンプリング法」を用いて、「上層家庭の成績上の生徒」、「上層家庭の成績下の生徒」、「下層家庭の成績上の生徒」、「下層家庭の成績下の生徒」の4つのカテゴリー[1)]を設定した。そしてアンケート調査から得た情報（成績と家庭の階層）によって、インタビューが可能な対象を選出した。実際許可を得てインタビューを実施したのは8つの家庭であった。その構成は、表１の通りである[2)]。インタビューは平日の夜あるいは週末に、生徒の家に1時間30分から2時間30分の訪問をして実施した。親の要求に応じ、家庭以外の所でインタビューを実施したケースが１件あった。インタビューの対象は、父親か母親あるいは両親である。

表1 調査対象の構成表

調査生徒	成績状況	家庭階層	父親職業	母親職業	家庭年収〔万元〕	住宅状況	父親学歴	母親学歴	パソコン	書物〔冊〕	進学希望
オモ	上	上層	研究所所長	医者	10	研究所宿舎	大学	短大	ある	1000	重点高校
ゴ	下	上層	企業主	企業管理	40	高級住宅	高校	高校	ある	20	普通高校
カン	下	上層	高級管理職	会社会計	12	高級住宅	大学	高校	ある	50	普通高校
サイ	上	下層	工場労働者	工場労働者	2．28	工場宿舎	高校	高校	ない	600	重点高校
チン	上	下層	工場労働者	工場労働者	2．16	工場宿舎	高校	高校	ある	100	重点高校
トン	上	下層	工場労働者	工場労働者	2．04	工場宿舎	専門学校	専門学校	ある	150	重点高校
ユエ	下	下層	工場労働者	失業者	1．62	工場宿舎	高校	高校	ない	20	専門学校
オウ	下	下層	新聞販売	新聞販売	2．04	工場宿舎	中学校	中学校	ない	5	専門学校

４．８つの家庭に見られる社会階層変動

8人の生徒の家庭には、中国の社会変動と共に、この十数年間で大きな変化が生じた。これらの生徒の家庭の変化は、中国社会の急速な変化を反映している。親たちの内、高級管理職、企業主などになった者もいるが、元工場の労働者で、企業の不況によって失業し、生活が苦しい状態に陥っている親もいる。

4．1　上層に上がった家庭

新しく形成されている中国の社会構造の中で、職業を基準として各階層は序列化されている。その中で、社会の上層に分類されるのは、組織的資源（権力資源）、経済的資源、文化的資源の三種類の資源を優越に占有している人たちである。本論文において、上層に属する家庭はオモくん、ゴくん、カンくんの3つの家庭である。

【ケース１】オモくんの家庭　　オモくんの父親は山東省の田舎の出身で、祖父は農村の小学校の校長であった。オモくんの父親は小さい時から勉強が好きで、ずっと成績が良かった。中国の文化大革命が終わった翌年に、大学受験制度が復活した。はじめての受験生として、北京のある大学に進学した。大学卒業後、現在の職場に就職して、ずっと金属防腐についての研究をしてきた。その研究の業績の積み重ねによって、研究所の所長に昇進した。中国政府の「五・一労働賞」を受賞したこともある。オモくんの母親はL市の出身で、大学卒業後、医者として、市立病院で働いてきた。オモくんの父親の説明によると、家の面積は100平方メートルで、L市の平均水準と比べて高いレベルであるが、現在、別荘地の住宅を買い求めているという。

【ケース２】ゴくんの家庭　　ゴくんの両親は、ともにL市の周辺地域に生まれた。親戚は大体この地域に住んでいる。父親の親は、肉体労働者であった。母親の親は、昔は農業に従事していたが、都市の開発とともに土地を失って、商店の経営を始めた。父親は17歳の時に学校をやめ、港の都市で働き始めた。貧しい生活からの脱出は、ゴくんの父親の強い原動力となった。1992年に建設会社を設立した。現在は不動産会社に発展して、従業員は100人以上である。夫婦一緒に会社を経営している。

【ケース３】カンくんの家庭　　カンくんの父親はL市の周辺の農村で生まれて、親は農業に従事していた。カンくんの父親は高校卒業後軍隊に入隊し、同時に軍隊の大学に入学した。卒業して、あちこち転勤したが、91年に現在の空港の管理職に就いた。カンくんの母親はL市に生まれ、親はタバコ会社の工場に勤めていた。母親は数年間商業会社の社長をしていた。カンくんの両親は、自分たちがいい生活を得られるように、10年間ぐらい頑張ってきたという。その間、家庭の中心的な関心は、経済の向上にあった。カンくんの家は、L市の中心部のある高級住宅地にある。

3つの家庭の親は、いずれも昔の田舎あるいは工場労働者の家庭の出身であるが、それぞれ上昇してきて、裕福な生活を手に入れている。しかし、生活の内容および求めている価値においては、異なる様相が見られる。

4．2　下層に落ちた労働者家庭

本論文で、下層に属する5つの家庭はすべて労働者の家庭である。中国の労働者階層は、歴史的に高い社会的地位を占めていた。新しい中国の成立とともに、労働者階層は、中国のリーダーとしての社会的地位が確立された。しかし、この数十年の間に、中国社会の全面的な改革の中で、都市労働者階層に対する優遇政策はなくなり、都市労働者の社会地位は著しく低下している。中国社会の研究者の間でも、都市労働者階層を社会下層に分類するようになっている。

【ケース４】チンくんの家庭　　チンくんの家庭は、工場住宅地の五階建てビルの4階にある。両親は中

国の「文化大革命」を経験し、あまり良い教育を受けなかった。父親は、企業の低級管理職であり、母親はブルーカラーである。父親の勤務先企業の経営状況は良くないので、時々何ヶ月か遅れて給料が支払われることがある。母親は一度失業したことがる。両親の平均月収は、父親が1200元、母親が600元で、L市の工場労働者の平均月収と比べて、少し下回っている。

【ケース5】ドンさんの家庭　ドンさんの家庭は、L市東北部のある住宅地の3LKの部屋に住んでいる。両親は、田舎から専門学校に進学し、卒業してから、現在のエアコン会社に勤めている。父親は、会社の修理部で修理と会計の仕事をしている。母親は、会社の倉庫管理職である。家庭の総収入は、1,700元である。L市の工場労働者の平均水準に達していない。

【ケース6】サイくんの家庭　サイくんの家庭は、L市の周辺部にある工場住宅ビルの2LKの部屋に住んでいる。サイくんの父親は、高校卒業後21年間段ボールの工場で勤めてきたが、いま、工場は不景気である。2年前電器修理の仕事を兼職し始めた。現在、合計収入は大体1,200元である。母親は、高校卒業後、ずっと印刷工場で働いていたが、昨年早期退職となって、今の月収は600元である。

【ケース7】コエくんの家庭　コエくんの家庭は、工場宿舎の3LKの部屋に済んでいる。コエくんの父親は、工場で部品加工の仕事をしている。母親はある企業の保健室で仕事をしていたが、企業の倒産で仕事を失った。現在家でセーター加工の仕事に従事している。父親の月収は600元、母親の月収は500元で、家庭の収入はL市では、低い水準である。家庭経済の状況は厳しい。

【ケース8】オウくんの家庭　オウくんの両親は、ともに中学校卒である。15年前農村からL市に来た。L市に来る前に、結婚して2人子どもを生んだ。祖父は「山東省○○庁」の庁長であったが、10年前亡くなった。オウくんの母親は、食品工場で仕事をしていたが、3年前工場が倒産した。父親も3年前工場を解雇された。その後夫婦2人で新聞の販売をはじめた。現在毎日の収入は30元程度で、それで一家の生活を維持している。

以上5つの労働者家庭の経歴から、中国における労働者階層全体の境遇が窺われる。すなわち、中国の改革開放政策の実施以来、労働者階層の社会地位は急速に低下するとともに、収入、福祉などの面でも、比較的不利な立場に転落しつつある。

4．3　8つの家庭の社会地位の変化

3つの上層家庭は、その上昇ルートがそれぞれ違う。オモくんとカンくんの親が、学歴の獲得によって社会的な上昇を達成したのに対して、ゴくんの親は、学歴とは無縁なまま、経済的な成功によって社会上層への仲間入りを果たした。そのため、3つの家庭においては、所有資本の量や構成は違う。共通しているのは経済の面でかなり裕福な生活ができている点である。高級住宅と車の保有はその豊かな生活の象徴でもある。

同様に、労働者階層の構成にも、複雑な様相が見られる。労働者の親は各階層から労働者階層に入っている。5つの家庭の中に、祖父が大学の先生（チンくんの祖父）、高いレベルの国家の管理者（オウくんの祖父）あるいは大企業の高級管理者（サイくんの祖父）である場合もあれば、もともと工場の労働者（コエくんの祖父）や田舎の出身者（ドンさんの祖父）である場合もある。この現象は、中国の労働者階層が1970年代末まで高い社会的地位を占めていたことに関連すると思われる。労働者階層に入ることは、当時の中国の人々にとって、社会的上昇移動であった。従って、現在同じ労働者家庭だからといって、家庭の同質性が高いと断定することはできない。

8つの家庭の社会的地位の変化に見られるように、中国の社会の急激な変化によって、社会の階層構造は大きく変わりつつあり、社会階層の構成の複雑な様相も生みだした。

5．家庭の資本構造と教育戦略

生徒たちの家庭の資本構造は、複雑な様相を呈している。上層に行くほど、経済資本は豊富になっていくが、文化資本にはこのような特徴がみられない。この現象は、中国の社会階層形成の段階と関係していると考えられる。各生徒の家庭は、その変化の過程と状況に関連して、異なる教育戦略を用いていた。以下、各家庭の資本の所有と教育戦略を分析する際に、生徒の成績を基準とし、階層ごとに八つの家庭を記述する。

5．1　上層家庭の教育戦略

本研究の対象の中に、3つの形態の文化資本がともに豊富な上層家庭は、オモくんの家庭しかない。経済的に裕福な他の2つの家庭は、文化資本の様相は必ずしも豊かとはいえない。3つの家庭に見られる文化資本の状況と教育戦略には、大きな違いが存在する。

5．1．1　成績上位の生徒の家庭における文化資本と教育戦略

オモくんの成績は、2学年の冬試験で、クラスの中の23番目である。上の3分の1に入っている。普通はこの成績で、名門高校に進学する事は難しい。しかし、卓球の試合の成績が優秀なので、中学校2年という時点で、名門高校の入学許可をほぼ確実に獲得した。

①高い教育への志向

オモくんの父親は、中国の教育制度を普通の親より深く理解している。特にその競争について、普通の方法で勝ち抜くのは並大抵のことではないとオモくんの父親は考える。しかし、中国の学校制度では「特技のある生徒」に対する特別入学制度が設けられているので、オモくんの父親は、この制度の利用によって息子の名門大学への進学可能性を高めようとしてきた。

「いまの中国では、進学の競争が激しすぎます。普通の子どもがいくらがんばっても、重点高校に入学できる点数を獲得できる保証はありません。だから、私はほかの道を考えました。現在、北京大学、清華大学などの大学は特技のある生徒を選抜する制度があります。例えば、卓球に強い生徒が一定の点数すなわち普通の点数の70％に達したら、入学ができるというような特別な枠があります。また、重点高校も、同じような制度を設けています。だから、息子の卓球の訓練を続けさせました。」

〔オモくんの父親〕

②文化的環境の整備

オモくんの家庭の変動は、段階的な上昇である。父親は、大学卒業後、ずっと同じ研究所で勤め、業績が積み重なるとともに、地位も上昇した。母親は病院の勤務医を勤めている。家庭の経済状況は豊かで、しかも徐々に上昇している。このような発展過程から、親自身が高い進取的精神を持ち、子どもにも高い期待を持っている。オモくんの家では、本をたくさん所有している。そして、オモくんの父親は、息子の勉強にも強い関心を持っている。

「家では、本は少なくとも、1,000冊ぐらいあります。しかし、息子は卓球の訓練もありますから、時間的にたくさんの本を読む余裕がありません。本があっても、読まないと役に立ちません。だから、息子に読ませたい本を、私がまず読み、息子にふさわしいと判断したら、買ってやります。私は常日頃から息子が本を嫌がらないように努力しました。」

〔オモくんの父親〕

本をたくさん読むことよりも、オモくんの父親は、息子の勉強の興味を直接に引き出す方法を考えていた。特に、息子が難しいと感じる物理学に、力を入れている。オモくんの父親は、物理学の実験道具まで

家に用意している。オモくんの家には、コンピューター、電子辞書など勉強に必要なものは何でもそろっている。オモくんの父親によれば、わざわざこれらのものを買ったのではなく、必要に応じて所有するようになったのだという。

③積極的な勉強への支援

オモくんの家では、親の子どもの勉強への積極的な関与がよく見られる。父親は仕事が忙しいが、子どもの勉強と卓球の訓練の指導を毎日欠かさないようにしている。そして、オモ君の父親は、家庭が子どもに与える影響をはっきり意識している。特に、親として暖かい家庭の雰囲気をつくって、子どもをその雰囲気の中で成長させることは、子どもに対して一番いい早期教育になるとオモ君の父親は信じている。

オモくんの家庭には、経済資本が豊かである。豪華な住宅、豊富な本、コンピューター、個人の勉強部屋、そして学校の物理学実験の道具まで持っている。豊かな経済資本は、単に物質面でオモくんの家庭生活に影響しているだけでなく、教育方針にも影響している。経済面でのプレッシャーがないからこそ、高い教育目標を達しやすいが一定の「危険性」もある教育戦略を取ることができると考えられる。

5．1．2 成績下位の生徒の家庭における文化資本と教育戦略

ゴくんは、クラスの中では、目立たない生徒である。中学校2年の2つの学期試験では、クラスの60番目以下の成績であった。成績はよくないが、あまり悪いことはしない。カンくんは、背が高くない生徒で、クラスの前の方に座っている。成績は、2年連続60番目以下である。同年齢の生徒と比べて、まだ子どもっぽいと母親は考えている。

カンくんとゴくんの家庭は、すでに高級マンションや車などを所有し、豊かな生活を営んでいる。この意味でカンくんとゴくんの家庭は中国における経済的上層といえる。しかし、文化資本の面では、必ずしも経済資本のように高いとはいえない。2つの家庭の親は、学歴の面では決して高くはない。4人のうち3人が高校あるいは中学卒である。ゴくんとカンくんの親の従事している仕事、それぞれの経歴はかなり違う。しかし2つの家庭の教育の戦略には共通する部分が見られる。

①子どもの教育は二の次

ゴくんとカンくんの家庭は、ともに中・下層から急上昇してきた家庭である。そのため、子どもが小さい頃、家庭の中心的な目標は経済の上昇にあった。子どもの勉強には力を注がなかった。

ゴくんが5歳までは、両親の会社の創業期であった。ゴくんは漢字などを教わった記憶はあまりなく、自分一人で遊んでいる日が多かった。その頃、父親はとても忙しかった。母は金物店を経営していた。ゴくんの両親は子どもの早期教育について考えたこともなかった。子どもの教育に対するゴくんの父親の態度には、一定の矛盾が感じられる。一方では、子どもがいい成績を取って、将来大学に行って欲しいという期待を持っていながら、他方では、大学に行かなくても経済的な成功を収めることができると考えている。ゴくんの父親は、自分は学生時代に勉強は全然できなかったが現在は成功していると、何回も口にした。

「実は、学歴さえあれば成功するというわけではないと思います。実力がないと役に立ちません。例えば、私はただの高校卒ですが、私の企業にも何名もの大学卒業生がいます。だから、自分の学歴が高くなくても、会社を作れば、大学卒業生を雇用することもできます。」

〔ゴくんの父親〕

カンくんの両親は、自分たちがいい生活を得られるように、10年間ぐらいがんばってきたという。その間、家庭の中心的な関心は、経済の向上であった。父親は、いまでも、仕事は一番大事だと考えている。毎日10時間以上仕事をしている。母親は、カンくんの小学校5年の時、社長の仕事を辞めた。その後、2度転職したが、現在、家の近くにある不動産会社の会計をしている。

「その頃、息子の教育には、あまり力を注ぐことができませんでした。しかし、私ども夫婦がもしあんなにがんばらなかったら、現在の生活レベルには達することができなかったと思います。」

〔カンくんの父親〕

中学校2年の時点で、親はカンくんの進学について、悲観的な考えを持っている。いま考えているのは、「高校に行かないと、将来仕事がきわめて難しいから、普通の高校には絶対行かせたい。その後、カンくんの勉強状況を見て、どうするのかを決める」ということである。

②文化的な環境の欠乏

経済的に豊かになった2つの家庭には、意外と文化資本は乏しい。経済的資本が、子どもの勉強に役立つ「文化資本」に転化できるとは言い切れないのである。ゴくんの家では、コンピューター以外、あまり子どもの勉強に関係するものは見られない。家の中に、雑誌を含めて、本がわずか20冊しかない。カンくんの家でも、大体同じような事が見られる。カンくんは週に一回週刊誌を買っているが、両親はあまり本を買わない。カンくんが読み終わったら、親が読むという。

③お金の投入と勉強の子ども任せ

2人の生徒の親は、ともに子どもの勉強に対する積極的な支援が少ない。経済的に豊かになるに伴って支援が多くなる場合でも、時期的に遅い点、方法が欠如している点において特徴的である。

ゴくんが5歳になる頃、両親は経済的に豊かになっていた。しかし、会社の経営は一層忙しくなった。その時、私立学校が、初めて山東省に設立された。ゴくんの両親は、子どもを教育する時間と精力がないため、教育の質の高そうな私立学校に息子を入れることに決めた。1993年にゴくんは家から離れて、山東省の青島市にある私立学校に入学した。しかし、私立学校の教育の質はゴくんの親の期待するほどではなかった。結局小学校4年の時、再びL市のＹ小学校に転校した。子どもの早期教育について、ゴくんの父親は、こう語っている。

「5歳の時、息子を山東省の初の私立学校に入れました。自分は子どもを教育する時間と精力はありませんから、いい教育を息子に受けさせたいので、私立学校に行かせました。実は、息子の教育に既に50万元以上のお金を投資しましたが、効果はあまりなかったようです。少し悔しいです。」

〔ゴくんの父親〕

カンくんの早期教育について、両親はほとんど何もしなかったといってもいい。カンくんが生まれてから5ヶ月後、田舎の祖父母の家に預けた。そしてカンくんは、小学校4年まで、ずっと祖父母の所で育てられていた。カンくんの父親は、自分が幼い頃早期教育を受けた経験がなかったため、息子の早期教育について考えもしなかった。

中学校二年になった現在、カンくんの両親は、息子の勉強を気にしている。何とかしようという気持もインタビューからよくわかる。もともとカンくんは別の通学区の学校に入学しなければならなかったため、カンくんの親は、カンくんをいまの学校に入れるために、1万元以上のお金を出したという。

上層の生徒の家庭に共通するのは、家庭の経済資本の豊富さである。3人の生徒の家庭は、かなりの経歴の違いが存在するものの、中国の社会変化にともなって、社会の下層から、上層へと移動した。しかし、3つの家庭は、親の学歴、職業、経歴の違いによって、それぞれ違った教育戦略を採ってきた。特に、家庭の上昇過程の違いは、家庭全体の生活スタイルの違いをもたらし、さらに、異なる親子関係をつくりだした。

上層家庭の経済資本の有利さが、直接に子どもの成績とつながらないことは、明確になった。経済資本の有利さが、子どものいい成績に転化するためには、一定の「媒介」が必要である。すなわち、親の子どもの教育に対する態度、子どもの教育への関与、家庭の「文化的資本」の蓄積などが、子どもの学業成績

に密接に関係する。これらの「媒介」がなければ、家庭の経済資本は、子どもの勉強につながらないことが本節で明らかになった。

5．2　下層家庭に見られる教育戦略

中国社会の変化の中で、下層階層の子どもにとって社会的上昇移動の手段はほぼ学校教育に限られている。そのことは労働者家庭の親たちの共通認識となっている。本研究においても、5つの労働者家庭の親たちは、子どもの教育に対して高い期待を抱いている。

労働者家庭は共通して、経済的には不利な立場に立たされている。しかし、共通する階層的な背景の中で、各労働者家庭に見られる教育戦略にはかなりの違いが存在しているのも事実である。教育戦略の相違は、労働者家庭の子どもの学業達成に対して影響を与えていると考えられる。本節では、成績のいい労働者家庭の生徒とそうでない生徒の家庭をそれぞれの教育戦略に焦点を当てる。

5．2．1　成績上位の生徒の家庭における文化資本と教育戦略

労働者家庭の生徒のなかで、チンくん、サイくんとドンさんの3人はいい成績をおさめている。チンくんは、2学年末の試験で学年の第5位であった。ドンさんは、クラスの中で、ずっと第3番目の成績で、学年の中でも、20番目の好成績を収めている。サイくんはクラスの中で2年連続2番で、学年中では8番である。3人の生徒の親たちは、それぞれの企業で、それぞれの職業に従事している。子どもの教育への情熱とそれなりのノウハウを持つのが共通に見られる特徴である。

①高い教育への期待

3人の労働者家庭の親たちは、子どもの教育達成に相対的に高い期待を持っている。親たちは自分自身の経歴から、そして現在の社会変動から、学歴が子どもに対してきわめて大きな意味を持っていることを悟っている。3人の子どもの親たちは、大学に行くことを労働者階層から脱して社会地位を向上させるほぼ唯一のルートと考えている。このような認識は親たちの子どもへの高い教育期待と繋がっている。

サイくんの両親にとって、子どもの勉強の動機づけは、かなり明確で現実的である。現在の社会では、高い学歴を持たなければいい仕事を手に入れられないから、息子をどうしても大学に行かせたい。サイくんの父親は、大学の学歴の重要性を息子に伝えている。

「将来、いい仕事、いい収入があることこそが生存の条件です。いまの勉強は、将来の仕事と関連して考えるべきだと、時々息子に話しています。」

〔サイくんの父親〕

ドンさんの両親は、学歴を重視し、娘の進学については、大学まで行ってほしいと願っている。娘がかなりがんばっているので、あまり学習の事に口をはさまないが、時々社会の変化や自立力の重要性について話す。特に娘に良い環境を作ってやる事の重要性をよく認識している。

「親は子どもの勉強にそんなに大きい影響を与えているとは言えませんが、親として子どもの勉強を重視しなければなりません。時々職場のことも娘に話します。われわれは、仕事を一生懸命やっています。そうしなければ、解雇される。失業すると、怖いですよ。だから、生徒の本業は勉強です。成績は重要です。」

〔ドンさんの母親〕

チンくんの場合、親は子どもが大学に行くこと、そして名門大学に行くことを当たり前のように考えている。その自信は、チンくんのいい成績から得られている面もあるだろう。しかしチンくんの小さい時に、この目標はすでに確立していたという。「息子が大学に行かないことなんて、考えもしなかったです。大

学に入らないと、貧しい生活しかできないから」というチンくんの父親の話には、労働者家庭の親の高い教育期待の背後に潜んでいる不安が表れている。

②社会関係資本による「周辺的文化資本」の獲得

労働者家庭において、親の学歴に代表される「制度化された文化資本」と本やコンピューターなどの「客体化された文化資本」とは、ともに多くない。これらの文化資本は、P．ブルデューの文脈から言えば、「個人的」に存在する文化資本である。しかし、労働者家庭のインタビュー調査を通じて、文化資本の他の存在形態を発見することができた。それは「周辺的文化資本」の存在である。3人の生徒の家庭は、社会関係資本を通じて、周辺的文化資本の獲得の戦略を取っている現象が見られている。

「周辺的文化資本」とは、個々の家庭には存在しないが、その家庭の周りに存在する形態の文化資本である。親族や職場仲間の中に存在する高等教育経験者は、そして、各家庭の周辺にある利用可能な書物、絵画、辞書、道具、機械など「周辺的文化資本」を労働者家庭の成績の良い生徒はよく利用している。

チンくんの祖父は、大学教師で、チンくんの小さい時から、チンくんの教育に力を入れていた。サイくんの祖父はある工場の社長であった。学歴は高くないが、職場でいろいろ教育を受けた。祖父の指導によって、サイくんは読み書きの習得などが早かった。また、チンくん、サイくんとドンさんの親は、職場における高等教育経験者との交流も多かった。

「中学校に入った後、初めの2ヶ月は、娘はすごく緊張しているようでした。特に英語は難しそうでした。大学を出た同僚から、英語の勉強の近道はないが、よく読む、よく聞く、よく話すのが、一番有効な方法だと言われました。これを娘に話したら、緊張が大分やわらげられ、だんだん落ち着きました。」

〔ドンさんの母親〕

同時に、3つの家庭の子どもは、音楽教室、美術教室、少年宮（子どもセンター）あるいは本屋をよく利用している。

「小学校の3学年の終わる頃、勉強ばかりさせていてもどうかと思って、何か習い事をしないかと娘を誘いました。それから、『少年宮』で電子オルガンと絵を習い始めました。電子オルガンの勉強は1年半ぐらい続けました。絵の勉強は今でも続けています。」

〔ドンさんの母親〕

以上のように、家庭の「周辺的文化資本」の存在は、特に労働者家庭の子どもの学業達成において大きな意味を持っている。しかし、「周辺的文化資本」の利用は、家庭の社会関係資本の所有状況と緊密に関係する。つまり、コールマンのいう社会関係資本は、「周辺的文化資本」への接近において大きな役割を果たすといえよう。労働者家庭の周辺的文化資本の獲得に影響する社会関係資本は、家族内社会関係資本と、家族外社会関係資本の2つの形態が存在する。

家族内の社会関係資本は、親族の血縁関係から自然にできたつながりに由来し、その繋がりの緊密さによって、親族内の周辺的文化資本を共有することが可能になる。家族の中に大学経験者が存在すれば、この文化的資源の共有の効果をさらに増大させることになる。家族の助け合いは、違う世帯の資源を補い合う効果をもたらす。

「私の働いている工場には大学を卒業した人が何人かいました。よく子どもを工場に連れて行って、その人たちと話をさせました。時にはその人たちを家に招いて子どもとの交流の機会をつくったこともあります。子どもはよくその人達に褒められますよ。」

〔チンくんの父親〕

家族外の社会関係資本も、子どもの学業達成に重要な作用を持っている。職場仲間からは、子どもの教

育に関する情報や助言をもらえる。親と学校の先生がよい人間関係を保持するならば、子どもは学校生活において、先生の関心と各種のチャンスをより多く獲得することになる。

「学校の先生との関係をとても重視します。息子が、小学校に入ったとき、私は先生に手紙を書きました。先生は喜んでくれて、息子にも注目してくれるようになりました。小学校から今まで、PTA会には全部出席しています。」

〔チンくんの父親〕

社会関係資本による「周辺的文化資本」の獲得は、成績のいい3人の家庭にとって、自分の家庭の文化資本の不足を補う意味を持っている。この戦略によって、3人の家庭は文化資本の障害を乗り越える事が出来たといえよう。

③積極的な勉強支援

三人の生徒の親は、小さいときから、子どもの勉強に熱心な指導を行っている。そして、今の段階では子どもの勉強内容はだんだん分からなくなっていると言うが、子どもの勉強の協力や精神面のサポートを重視している。

サイくんは、小さい時から質問が好きで、好奇心に溢れていた。親はこの特徴をよく捉えていた。息子の問いかけを大事にして、できるだけ正しく答えてやることは、サイくんの両親の原則であった。特に何かを計画的に行ったわけではないが、サイくんの両親は、普通学校で教えている内容を早いうちに息子に教えた。

「小学校の時は、息子の勉強の手伝いや、具体的な指導を多くやりました。その頃、勉強の内容はまだやさしかったです。主人は理科系の科目の成績がよかったし、私も文学が好きで、いろいろな助言をしました。」

〔サイくんの母親〕

ドンさんの母親は、娘が小さい頃、その勉強に積極的にかかわってきた。幼稚園の選択では、有名な幼稚園を選び、苦労して毎日遠いところの幼稚園に通わせていた。そして、小学校や中学校のはじめ頃までは、よく勉強を手伝ったり、アドバイスをしたりしていた。

チンくんの親は、子どもの勉強にたいする指導は、中学1年の時にもうすでにできなくなったというが、職場の大学卒の人や大学の先生である祖父の力を借りて子どもの勉強を積極的に支援しているという。

成績のいい労働者家庭の生徒たちの家庭は、必ずしも豊富な教育的資源に恵まれているとはいえない。しかし、これらの家庭は、両親の教育熱心さから、早期教育の実施という戦略を採った。この早期教育の成功によって、子どもは小学校入学の段階ですでに有利な立場を獲得している。そして先生から誉められたり、ほかの子どもから尊敬されたりして、自分も満足感を味わう中で自尊心も形成され、これが更なる勉強の動機づけとなって、高い学力につながっている。同時に、家庭で限られた文化資本を十分に利用することによって、家庭要因と学校要因の相乗効果がもたらされ、子どものいい成績が維持される。以上が、いい成績の生徒が形成されるメカニズムといえるだろう。

5．2．2 成績下位の生徒の家庭における文化資本と教育戦略

コエくんはとてもまじめな生徒で、口数も少ない。2学年の学級試験は、コエくんは、クラスの中で68番目である。オウくんはクラスの授業に、半分以上出席していなかったため、1年生の時の成績はクラスの70番目で、2年生からは試験にも参加していない。よくほかの生徒と喧嘩したり、タバコを吸ったりし

て、先生たちを悩ませている生徒である。２人の生徒は学校の適応状況はちがうが、家庭にはよく似ている部分がある。

①高い教育目標の放棄

二人の生徒の家庭では、親が教育の重要性を認識しているにもかかわらず、家庭の経済状況と子どもの成績不振によって、早いうちに高い教育目標を放棄した。

コエくんの進路について、母親はかなり悲観的な見通しを持っている。大学に行く可能性はもう諦めているようである。コエくんの親は、普通の高校に息子を行かせる意味はないと決断し、職業高校に行かせ、早く仕事に就かせることを計画している。

「息子は高校にあがれないと思います。高校、大学に行かせたくない訳ではないですが、それは現実性がありません。息子には手に職さえあれば、仕事を見つけて、生活を保証できると思います。だから、息子は専門学校に行って、技術を身につけて自立するしかないと思います。」

〔コエくんの母親〕

オウくんの母親は、現在の社会において大学に行くことが子どもにとって非常に重要であることはわかっている。成績がよければ、借金をしても息子を大学に行かせたいと考えている。しかしその気持ちは、なかなか息子に伝わらないようである。

「現在勉強しないと、将来社会人になったら、きっと後悔すると時々言いますけど、全然聞いてくれません。」

〔オウくんの母親〕

②資本の少なさ

2つの家庭の共通点は、子どもの勉強への投資の少なさである。子どもの勉強に必要とされる物も足りない。コエくんは自分の部屋を持っているが、コンピューターがないし、本などの「文化資本」も少ない。オウくんの場合は、勉強部屋、コンピューター、本など何も持っていない。

「家には、古い本、学校から配られた本、そして娯楽、体育雑誌など全部で20冊ぐらいです。学校から配られた英語の読み物もありますが、読んでもあまり役に立ちません。」

〔コエくん　フィールドノーツ〕

また、2人の生徒の家庭は、子どもの勉強に役立つ社会関係資本も少ない。オウくんは故郷である河北省の農村で生まれ、3歳までは、そこで祖母と一緒に過ごしていた。その後、祖母に連れられてL市に来た。親戚は、大体故郷に住んでいる。L市には、父親の妹の一家がいるが、年に数回しか会えない。コエくんの両親の家族は、大体L市に住んでいるが、以前からあまり交流は多くない。特に、近年、コエくんの両親は、生活の維持に精一杯で、親戚たちと顔を合わせることも少なくなっており、せいぜい年に1、2回みんなで集まる程度である。そして、家庭以外のネットワークも少ないという。

「現在は工場に勤めていませんので、仕事仲間はいません。子どもの教育についての情報は少ないです。これは仕方ないです。」

〔コエくんの母親〕

③子どもの勉強は学校まかせ

二人の生徒の親は、自分の学歴が低いという理由で、子どもの勉強について無力感を抱いている。そして、学校の先生に大いに期待しているが、その期待は先生にも応え切れない部分が大きい。

コエくんの両親は、ともに高校卒であるが、自己評価は高くない。「文化大革命」時の高校生であることが、その理由の1つである。コエくんへの勉強の援助は、小学校の時には少しあったが、援助の仕方がわからないため、だんだんなくなっていった。コエくんの母親は、この事について戸惑いを感じている。

「現在、息子の成績はクラスの中でも悪い方になりました。私は本当に仕方のない人間です。悪い成績を見ると、頭にきて、叱ることしかできません。息子の頭は悪くないと思うのですが、どうして成績が上がらないのか、わかりません。」

〔コエくんの母親〕

学校の教育の仕方について、コエくんの母親は不満を持っている。自分の息子があまり重視されていないからだという。学校との関係について、コエくんの母親はこう言った。

「息子はいつも教室の後ろに座らされています。しかも、周りは、勉強が出来ない子ばかりです。もし周りに勉強の出来る子がいれば、多分息子に良い影響を与えてくれると思いますが、先生はそうしてくれません。自分の子どもは成績がよくないので、恥ずかしくて、先生にこの要求を話すことができませんでした。現在、PTA会にさえ出席したくなくなりました。」

〔コエくんの母親〕

オウくんの家庭には、亡くなった祖父以外大学経験者はいない。親は農村で教育を受けたが、ともに中学校までである。オウくんの親は、息子の教育に何の手だてもなく、もう先生しか頼れる人はいないという。

「担任の先生には、いろいろご迷惑をかけました。親として無力で、とても恥ずかしいです。時には先生に頼みます。もし、息子が何か悪いことをしたら、先生は殴ってもいいと言ったこともあります。」

〔オウくんの母親〕

以上のように2人の生徒の家庭に経済資本が相対的に少ない事はいうまでもない。そして2つの家庭の共通点は、子どもの勉強への投資の少なさである。2つの家庭の両親は、高校卒と中学校卒の学歴を持っている。この点では、クラスの普通の家庭とあまり差はないが、これらの親は自分の学歴に自信を持っていない。このため小学校の時から、子どもの勉強に対する指導と支援が少ない。このように親が所有する知識、物事の見方、子どもの勉強に対する態度から生み出される家庭の知的環境は、よいとは言えない。インタビューの時点で、2人の親は、子どもが大学に入って欲しいと言っていたが、実は子どもが小学校の頃成績はよくなかったため、すでに大学に行く可能性がないと判断していた。それ故、親の子どもの教育への関与の度合と意欲は、低い水準に留まっていた。言い換えれば、2つの家庭は、子どもの教育に対し援助する能力、意欲はともに欠けていたということになる。この2つの家庭は、子どもの教育について、学校に大きく依存している。親たちは、自分の能力、時間、経済力の弱さから、自分の子どもの教育を学校側あるいは先生がもっと重視して欲しいという意識を強く持っている。インタビュー中、コエくんの母親は、学校が自分の子どもにあまり関心を示さないことに対する不満を語っているが、このような要求を学校側に伝える勇気もなかなか出ない。そして、このような学校側に対する不信感から、学校への協力も少なくなっていた。オウくんの親は、担任の先生に自分の子どもの全てを一任したいという考えを持っているが、学校と先生はこれに応じきれないことがわかっている。2つの家庭の親は、学校の運営と仕組みについて、あまり馴染んでいないこともあって、学校に大きく期待しているにもかかわらず、学校、先生との交流がうまく行っていないようである。

５．３　文化資本と教育戦略の可能性

中国の各階層の家庭における文化資本の所有状況には、複雑な様相が見られた。階層間そして家庭間の文化資本の配分は不均衡である。その原因は、2つ考えられる。1つは、中国における急激な社会構造の変化によって上層に上がった家庭には、経済資本は豊富になったにもかかわらず、文化資本の蓄積が伴わなかった家庭も存在する。つまり、上層階層における「下層文化」の存在である。もう1つは、労働者階層の中に、文化資本の蓄積が相対的にできる家庭が存在することである。中国の労働者家庭には、欧米の諸研究に見られるような労働者家庭の子どもの教育に対するアスピレーションの低さ、あるいは学校文化に抵抗する「反学校文化」の存在はほとんど確認できなかった。むしろ中国の労働者家庭では、子どもの学業達成や子どもの学歴獲得に高い期待を持つのが一般的である。中国では社会的地位の低い家庭こそ、教育を通じて子どもの社会上昇を測ろうとする意識が強い。下層家庭にはいまや「教育」を通じてしか子どもの社会上昇手段がないという親の認識が共通に存在していることが推測できる。それと関連して、下層階層の中に、経済的制限を受けながら「周辺的文化資本」の獲得、そして文化資本の蓄積が相対的にできる家庭も存在する。

文化資本の多少は、各家庭の教育戦略と関連して、子どもの学業達成に影響する事は言うまでもない。上層の家庭のなかで、文化資本が不足する家庭においては、経済資本による子どもの教育機会の獲得に影響する戦略が見られるが、その効果はその親たちが思っているより小さい。反対に、労働者家庭では、文化資本の獲得の努力によって、子どもの学業達成を高めようとする戦略が幾分成功している。

また、「周辺的文化資本」と社会関係資本における差異の分析によって、社会関係資本が子どもの学業達成にもたらす影響も明らかになった。ここには労働者家庭の子どもの学業達成における社会関係資本の可能性を読み取ることができる。労働者家庭の社会関係資本は、構造的な経済資本と文化資本の不足という不利益を補う役割を果たし、その階層的な障害を乗り越える可能性を示している。

６．考察

中国の急激な社会変動は、短期間に社会階層の分化をもたらした。特に経済資本の所有の変化は大きい。近年指摘されてきた中国社会における貧富の格差の拡大という現象によって、本研究においても明らかになったように、上層の家庭の収入は労働者家庭のそれと比べて10倍あるいは数十倍の差を見せている。親たちの社会的地位の変化は中国の社会構造の変化に左右されているが、学歴の獲得による社会上昇と、経済資本の獲得による社会的地位の上昇という2つの上昇ルートが本研究において確認された。同時に、労働者階級の構成の複雑な様相が明らかになった。労働者階層の構成員の中には、田舎の出身者や労働者家庭の出身者だけではなく、知識人の息子や企業の高級管理者の息子もいる。これが中国のいまの階層の構成の特色といえよう。

現在の中国では、教育達成の価値は、各階層においてかなり高い評価を得ている。つまり、高い学歴が子どもの社会的地位の上昇に重要な意義を持つことは、どの階層の家庭でも認められている。学歴は家庭の地位の上昇、維持の重要な手段として、既に競争の対象となっている。労働者階層の親も、その意味は十分認識している。確かに中国は、大学の進学率、国民の大学卒業率などの面では、まだ低い水準にとどまっている。しかし、社会上昇、階層形成のメカニズムは、すでに「学歴社会」の様相を呈していると言っていい。この「学歴社会」の現実が、都市部のあらゆる階層の意識に浸透していることは、本研究においても明らかになった。この教育への熱い期待は、中国の社会の教育競争を煽っている。

しかし、中国においては、階層による経済資本分布の不均衡によって、各階層における学校制度に影響する力の違いが現れてきている。家庭の資本は上層に行くほど多くなり、その差も大きくなっているのが現代中国の現実である。上層の家庭が、多額のお金を出して子どもを名門学校や私立学校に行かせる現象は、本研究でも見られている。それに対して、労働者の下層階級、あるいは失業者、半失業者の家庭は、あらゆる面で資本の低下状況に陥っている。収入の激減、職場の喪失、家庭関係の不安定などの現実は、これらの家庭の子ども教育への「投資」を不足させている。金銭で学校を選択するという現象は、現在の

中国の公的教育に、既に階層分化が入り込んでいることを意味する。中国における分化しつつある各階層の家庭には、その所有する経済資本によって、子どもの教育機会に与える影響に大きな差が存在する事が本研究で明らかになった。中国における教育の公平性に関する問題の深刻さは、社会問題化する可能性を秘めている。

しかし、学業達成において成功を収めた労働者家庭の中に見られたように、社会関係資本による「周辺的文化資本」の獲得の戦略は、階層的構造の制約を乗り越える可能性を示している。その戦略を可能にする条件とその限界について、より包括的な研究が必要であるが、それを今後の課題にしたい。

＜注＞

1）本研究は中国社会の上層と下層の分析を目的としたため、中間層の家庭のインタビューを実施しなかった。なお社会階層の分類は、中国社会科学院の陸学芸らの標準に従う。上層家庭は国と社会の管理者、大企業の経営者、企業主そして専門職の親を持つ家庭を指す。そして下層を各種企業で非管理、非専門職を従事する肉体労働あるいは半肉体労働者の親を持つ労働者家庭を指す（陸学芸　2002）。

2）個人情報を保護するために、本研究においては生徒の名前は仮名で表示している。

〈引用・参考文献〉

Annette Lareau　1989 *Home Advantage：Social Class and Parental in Elementary　Education*　The Falmer Press

張紀潯著　2001　『現代中国社会保障論』 創成社

James S. Coleman 1988 *Social Capital in the Creation of Human Capital* American Journal of Sociology, Volume 94,　pp.95-120

Pierre Bourdieu 1986 *The Forms of Capital* J. E. Richardson〔ed.〕, *Handbook of Research for the Sociology of Education* 1986 Greenword Press pp.241-258

P. ブルデュー＆J.C.パスロン　1970/1991『再生産：教育・社会・文化』〔宮島喬訳〕藤原書店

P. ブルデュー＆J.C.パスロン　1964/1997『遺産相続者たち：学生と文化』〔戸田清ほか訳〕藤原書店

Reginald M. Clark 1983　*Family Life and School Achievement*　The University of　Chicago Press

志水宏吉　清水睦美編著　2001『ニューカマーと教育：学校文化とエスニシティーの葛藤をめぐって』　明石書店

米村千代著　1999　「家」の存続戦略－歴史社会学的考察　勁草書房

〔中国語文献〕

李強著　2002　『転型時期的中国社会分層結構』　黒龍江人民出版社

陸学芸編　2002　『当代中国社会階層研究報告』　社会科学文献出版社

Class Shift and Educational Strategy of Chinese Families in a Time of Change : From the Analysis of Interviews with Eight Families

ZHANG Jian

This paper is based on the social change in present China, where the social structure has changed dramatically with the big change in economic structure. Accompanied with stratification of the society, distribution of educational resources and the way to approach it are also changing compared with before. It is considered that the influence of family background on a child's educational opportunity and academic achievement is getting stronger.

In this paper, eight families from a city in east China were studied regarding the capital each family owns and their choice of educational strategy , with the aim of analyzing the influence of the changes in each class of Chinese city in a time change on the academic achievement of a child, and underlying mechanism.